

小林秀雄のベルクソン論の詳細目次

佐藤雅男*

目次

- I ベルクソン論の見取り図
- II 『感想』の詳細目次
- III 全体構成と多分野年表
- IV 蜚の印象と物理学

I ベルクソン論の見取り図

小林秀雄の『感想』（ベルクソン論）は、1958年5月から1963年6月に、雑誌「新潮」に連載され、2002年5月に全集に特別収録された¹⁾。小林は、この作品収録を禁じたが、私達は今日、それを書籍において通読することが可能になった。また普及版に附けられた語彙の脚注は、本文理解を段階的に進展させる効果がある。だが、この『感想』と言われる長編の哲学的文章には、題や目次が存在しない。また全体の何処に区切りがあるのか定かでない。たしかに記号的な分割では、本文の流れは捉えられない。だがベルクソンの著作目次は精細であるし、他の本格的なベルクソン論にも、一般的に目次は附いている²⁾。

連載分の形式的な56回は、必ずしも各回ごとにテーマが異なるわけでは

*専修大学法学部兼任講師

ないが、この作品全体の構成には、対象と方法に関する質的な差異がある。その全体構成の軸として、『感想』にはソクラテスのダイモン・意識の直接与件論・哲学的直観の弾み・ゼノンのパラドックスなどの問題が、論述の発端や結節点に位置づけられる。その主軸はソクラテスのダイモンで、それと連動する他の3つの軸も別個に検討すべき大きなテーマである。また論述の進行からは、逸脱感を与えるショーベンハウエル論やフロイト論そしてハイゼンベルク論なども、潜在的には中心テーマのベルクソン哲学と深い類縁関係がある。プラトンやプロティヌス、また前半の生物学者や文学者や芸術家、あるいは後半の物理学者などの思想は、ベルクソンと有機的に関連する。『感想』という長編作品に不適當な題は、『ベルグソンの哲学—芸術と科学—』とでも言い換えた方がテキストの内容に即している。さらに全体に亘って小見出しを附ければ、より理解が深まる。

個性的な文学者による、哲学と芸術と科学の架橋に関わる思想的密度の高い本文を理解するには、先ずはよく読んで、その全体像を分節化しなければならない。それは本文の流れにそって、章と節に分けた詳細目次を模索することである。小林がこの長編を書くに当たり、予め設計図を用意し、それに順じて連載が成立したとは考えられない。むしろこの作品には彼の自然的な設計感覚が露呈され、それを読者が意識的に再構成する作業が本文理解の前提になる。そもそも題や目次がないので、そうした見取り図を作成することで、少なくとも全体像の推移を示すことが出来る。

本稿では『感想』を、より精密に読解するために、本文を章や節に分割しながら小林の典拠を明示し、その詳細目次を模索してみよう。また多分野年表を添付して、この哲学的文章の構成に潜在する問題点を検討してみよう。

II 『感想』の詳細目次

『感想』を14章31節に分割する³⁾。(1)(2)などは、形式上の56回の章番号であり、[11・1]は、11頁の一段落目のことである。全体軸の章は●■▲▲で示し、引用は◎で、言及は○とする。また、小林が「」で引用したベルクソンの言葉が、全集(白水社)の《第何巻の何頁》にあり、Bergson, Œuvres, Ed, du centenaire, P, U, F, 1959の(頁)とÉcrits et Parolesなど全集に含まれない単行本の(頁)を《8-7》(1)のようにした。尚、『L'Intuition philosophique』のように小林が欧文表記した所は、それに従った。

題名『ベルグソンの哲学—芸術と科学』

第一章 経験としての哲学 11頁

1 節, 経験の反響とダイモン

- (1) おっかさんという蜚 [11・1] プラットホームからの墜落 [13・3]
 ●ソクラテスのダイモン [14・3] ○『弁明』○『道徳と宗教の二源泉』遺言 [16・3] ◎『Écrits et Paroles I』《8-7》(1)

2 節, 哲学の方法

- (2) 対象と方法 [18・1] ◎『道徳と宗教の二源泉』《6-383》(1245) ○『意識の直接与件論』○『物質と記憶』○『創造的進化』持続 [20・2] ○『意識の直接与件論』直観 [21・2] ◎『思想と動くもの』「序論」II 《7-106》(1329) 「序論」I 《7-29》(1268) 自我の問題 [23・2]

第二章 心理学と哲学 25頁

3 節, 自由論

- (3) 自由の事実 [25・2] ■◎『意識の直接与件論』『時間と自由』《1-

202) (145) 《1-167》(119) 《1-168》(120) 時間◎「序論」I 《7-12》
 (1255) 《1-204》(146) [29・1] 相互浸透 [30・2] 自我の全体性 《1-
 129》(92) 《1-159》(114) 《1-179》(128) [31・2] ○『持続と同時』

4 節, 精神科学

(4) 科学と哲学 [33・2] 科学の無私 [35・2] ◎『創造的進化』《4-27》
 (502) 新しい精神科学 [37・2] ◎『思想と動くもの』の「序論」II (In-
 troduction II) 《7-81》(1309) ◎『創造的進化』《4-177》(623) ◎『ラ
 ヴェソン論』《7-289》(1455)

5 節, 哲学的直観

(5) 哲学の方法 [40・2] ○Introduction II 哲学的直観 [41・2] ★『哲
 学的直観』○『ラヴェソン論』○『物質と記憶』◎『L'intuition philoso-
 phique』《7-158》(1361) 芸術と哲学 [44・2] ○『哲学的直観』○『意
 識の直接与件論』○『創造的進化』
 (6) ショーペンハウエル論 その主著 [46・2] カント○『意志と表象
 としての世界』

6 節, 言語論

『笑い』の要約 [49・3] ○『物質と記憶』の要約 [50・2] ○ ▲『笑い』
 の芸術一般に触れた文 [52・2] ◎《3-120》(462)

第三章 生物学と哲学 53頁

7 節, 進化論

生命の創造 [53・2] 『創造的進化』の祖述 機械観 [54・3] 目的観 [56
 ・2] 進化の背後にある調和 [57・2]

8 節, 直観から分析へ

(7) 直観と分析 [58・2] 突然変異 [62・2] 自然淘汰 [63・2] ダーウ
 インとド・フリース [63・3]
 (8) 視覚器官の原因と結果 [67・1] 哲学に固有な対象 [69・2] ラマル

ク派の進化論 [70・2] 器官の複雑と機能の単純 [71・2] ◎『創造的進化』《4-27》(502) 機械観と目的観を超えて [73・2] 有機化と製造 [74・2]

9節, 生命の飛躍

(9) 視覚装置の創造 [75・1] 生命のはずみ [76・2] 肉眼を超えて見る努力 [78・2] セザンヌ

第四章 喜劇と哲学 79頁

10節, モリエール論『笑い』

(10) 強張りのおかしさ [79・2] パスカルの『パンセ』[84・2] 社会的欠点の処罰 [85・3]

高級喜劇とドラマの差異 [87・3] ○『守銭奴』 一般的なものを狙う喜劇 [89・2]

(11) 滑稽の概念 [91・1] エゴイズムより根深い虚栄心 [92・2] 笑いの苦味 [94・2] ◎『笑い』《3-148》(483) 喜劇の魂を見つめたモリエール [95・3]

第五章 芸術と哲学 96頁

11節, モーパッサン論

芸術家の詩的想像力 [96・2] ◎『Écrits et Paroles II』《8-369》(354) シェークスピア

(12) イリュージョンの名人 [99・2] モーパッサン『ピエルとジャン』の序文 ◎フローベル コントとテーヌのポジティヴィスム [101・2] ○『哲学』○『英文学史』の序文 ヴィジョンのオリジナリテ [103・2] 暗示という手順 [105・2] ○『意識の直接与件論』

(13) 真摯な努力の模倣 [108・2] ハムレット

第六章 知的努力の特徴 110頁

『知的努力』L'Effort intellectuel

12節, 図式とイメージ

瞬間的な記憶 [110・2] 思い出す努力 [112・2] ○テーヌ『知性論』○
 ビネ『めくら将棋』 物事を理解する努力 [115・2] 物を解釈する働き
 [116・2]

- (14) 発明の努力 [117・2] ○リボー『創造的想像力』 [118・1] 図式と
 イメージ [119・2] 精神の努力 [121・3] 生命の働き [124・2]

第七章 知覚の拡大 125頁

『変化の知覚』

13節, 知覚の拡大深化

- (15) 注意の転換 [125・2] ◎『笑い』《3-120》(462) ▲ゼノンの逆説 [129
 ・2] 不可分の変化 [131・2]
- (16) 運動の変化は不可分という感情 [132・1] 純粹な変化 [131・2] 実
 体を必要としない変化 [133・2] 自我というメロディー [134・2] 現
 在という永遠のメロディー [134・3] 命の絶え間のない耳鳴り [136・
 2] 動く物と動く私との関係 [136・3] 直観の拡大 [137・2] 持続と
 いう意識の直接与件 [138・1]

第八章 純粹知覚と純粹記憶 139頁

『物質と記憶』

14節, 純粹知覚の仮説

- (17) レオナルドのモデル [139・1] ○『ラヴェソンの生涯と業績』○『変
 化の知覚』○『使徒行伝』 常識の立場からの出発 [140・3] ○『意識
 の直接与件論』 イマージュの系 [142・2] 行動の中心 [144・2]
- (18) 脳髄の機能 [145・2] 意識的知覚 [147・3] 純粹知覚の仮説 [148・

2] 非決定の中心 [149・2] 反射現象としての知覚 [150・2]

- (19) 純粹知覚と物質の関係 [152・1] 知覚の制限 [154・2] 感じとか情
(affection) [156・2] 現実的作用と可能的作用 (感覚と知覚) [158・2]
人格の物理的根拠 [158・3]

15節, 記憶の分析

- (20) 哲学に固有な実証的方法 [159・2] ○『Écrits et Paroles I』○『精神生理学的並行論と実証的形而上学』パスツール
- (21) 二種類の記憶の相違 [165・2] 自動的再認 [168・1]
- (22) 注意を集中する再認 [170・3] 注意を働かす精神 [172・1] 知覚と記憶の輪道 [173・2] 知的作用における身体の機能 [175・2] 模倣運動 [177・2] 運動図式 [178・2]
- (23) 連想論 [179・3] 失語症 (リボーの法則) [180・2] 進行としての輪道 [181・2] はっきり再認された知覚 [183・2]

16節, 純粹記憶

- (24) 心理学を超えて [185・3] 現在の瞬間 [186・2] 純粹記憶の無力 [187・2] 無意識な心理状態 [189・2] 水平線と鉛直線が交わる現在 [190・2]
- (25) 空間という水平線と時間という鉛直線 [192・1] 知覚されない対象と無意識的記憶 [193・2] 存在の条件 [194・2] 未来を食べる掴み難い進行 [195・1] 記憶の円錐 [195・2] 自発と習慣の二種類の記憶 [196・2]
- (26) 知覚の目的 [199・2] 一般観念 [199・3] 記憶の移転と自転 [201・2] 連想論の誤り [202・2] 決心と理解的作用 [203・2] 物質から独立した記憶 [204・2]

第九章 無意識と夢 205頁

17節, フロイト論

- (27) 哲学と科学 [205・2] ○『自伝』○『夢判断』○「夢」○『物質と記憶』○『世界観について』○『フランスの哲学』 デカルト, ショーペンハウエル 対象と方法 [209・2] ○『序論』Ⅱ精神分析学の方法 [210・2] ○『意識の直接与件論』

18節, 夢の円錐体

- (28) メカニズムの衰退 [214・1] ○「夢」○「現在の思い出或いは誤った再認」1908 ○『物質と記憶』 目覚めた努力 [216・2] ○『夢判断』 基体としての夢 [217・2] 知的努力 [217・3] 精神と身体 [218・2] ○プロティヌス 無意識の記憶 [219・1] ○『物質と記憶』
- (29) 睡眠から覚醒へ [221・1] 演説をしている夢 [221・2] 夢という円錐体 [223・2]

19節, 偽物の再認

- 不思議な経験 [223・3] ○「誤った再認」 過去と現在が二重になる心理的経験 [224・2] 知覚と呼応する記憶 [225・2] 感覚や知覚の記憶 [226・2]
- (30) 知覚と記憶の相違 [227・3] 鏡の前に置かれた物 [229・3] 現在の思い出 [230・2] 自己の二重性 [232・2]
- (31) 偽物の再認と尋常な再認 [234・2] 類似の記憶 [235・2] 生活への一般的注意の衰弱 [237・2] 意識の跳躍の一時的停止 [238・2] 自己の経験 [239・2] 生活への不注意 [240・2]

第十章 純粹な内的経験 242頁

20節, 自己の経験の拡大

- (32) 自由という経験的事実 [242・2] ◎与件の英訳『時間と自由意識』プロティヌス『エンネアド』○コレージュ・ド・フランスに於ける「プロティヌス講義」◎『思想と動くもの』 IntroductionⅡ《7-106》(1329) 問題の提出 [245・2] ○『意識の直接与件論』 方法論 [246・2] ○

『哲学入門』○『意識の直接与件論』『物質と記憶』○『魂と肉体』『哲学的直観』○『創造的進化』○「序論Ⅱ」

21節, 内的実在の経験

- (33) 薔薇の香りの思い出 [248・1] ◎『意識の直接与件論』《1-149》(107)
○ブルースト『失われし時を求めて』 自我の直視 [251・1]
- (34) 等質的空間の直観 [253・1] カント 実在を経験する最初の場所 [254
・2] ●ソクラテスのダイモン [255・2] ○『L'intuition philosophique』
純粋な内的経験の現前 [257・2]

第十一章 常識反省と哲学『物質と記憶』 258頁

22節, 肉体を備えた自由

- (35) 自然に倣って理解する道 [258・2] ○『Sur le pragmatism de William James』 事実線の交錯 [260・2] ○『La conscience et la vie』 己れに還るという事 [261・2] 『意識の直接与件論』から『物質と記憶』へ [262・2] ○『J.Chevalier, Entretiens avec Bergson』『試論』
- (36) 反省する常識 [264・1] 私達は世界の唯中に生きている [265・2] ○『シュヴァリエとの談話』○『物質と記憶』第7版序 物のイメージ ユ [266・2]
- (37) 常識の尊重 [268・2] ○『Le bon sens et les études classiques』 本能的知恵と科学的知恵との中間 [268・3] 常識に現れた諸事実の線 [269・2] 自己反省としての常識反省 [271・2] ★哲学的直観 [272・2]
- (38) 「私」と身体 [273・3] 科学による常識の反論 [274・3] 意識の随伴 [275・2] アトムの運動 [276・2] 近代科学の測定的方法 [276・3]
- (39) 生命論と認識論 [279・2] 常識からの出直し [280・2] 行動の中心としての意識 [281・2] 肉体を供えた心 [281・4]

第十二章 純粹知覚と純粹記憶 282頁

23節, 純粹知覚の仮説

- (40) 知覚の範囲 [283・2] 非人格的な外的知覚 [285・2]
- (41) 行動の非決定帯 [288・1] 物のアフェクション [290・3] 知覚と感覚 [292・2]
- (42) 知覚理論の帰結 [293・2]

24節, 純粹記憶

知覚理論から記憶理論へ [294・2]

- (43) 二つの異なった記憶 [297・2] 言語の記憶 [298・3] 再認不能症 [300・2]
- (44) 自動的再認と注意を集中する再認 [302・2] 失語症の進行 [304・2] 現在の記憶 [305・2] 精神と身体の関係 [307・2]
- (45) 精神の中にある記憶 [308・2] ○『魂と記憶』 無意識の心理生活 [309・3] 現在の瞬間 [311・2] 過去から現在への進行 [312・2] 空間線と時間線との交点 [312・3]
- (46) 知覚されない対象と無意識の記憶 [313・2] 存在の条件 [314・2] 習慣と自発の二つの記憶 [316・2] 一般観念 [317・2]
- (47) 知覚の目的 [318・2] 一般観念の成立過程 [319・2] 記憶の拡散と収縮 [321・2] 精神生活における身体の職能 [321・3] 『物質と記憶』論の要約 [322・2]

第十三章 純粹持続—物理学と哲学 323頁

■『意識の直接与件論』

25節, 意識と科学

- (48) 直接的な接触 [323・2] ○『意識の直接与件論』▲ゼノンのパラドックス [325・2] 運動の實在 [326・2] 意識と科学の一致 [327・2] 精神と物質の協力関係 [328・1] ○『意識の直接与件論』○『物質と

記憶』 ○『創造的進化』ベックレル

26節，連続的物質と不連続的エネルギー

- (49) 的中された予想 [329・1] ○「特殊相対性理論」○「一般相対性理論」○『持続と同時』十九世紀の原子説 [329・2] ラザフォード・メンデレーフ 質点の力学 [331・2] ニュートン力学的世界観 [331・3] ヤング・フレネル電気現象と場の理論 [333・2] エールステット・ローランド・ファラディ プランクの作用量子 [334・2] ハイゼンベルク

27節，絶対的な不確定性

- (50) $W=h\nu$ [335・2] プランク・コンプトン 粒子と波の統一 [337・1] ボーア 波動力学 [338・2] ド・ブロイ デカルト
 (51) 物理現象の不確定性 [341-2] 不確定性原理 [343・2] ハイゼンベルク

28節，相対性理論

- (52) 相対性理論 [346・2] アインシュタイン・マイケルソン 場の理論 [349・2] 非ユークリッド的空間 [350・2]
 (53) 量子論の矛盾性 [352・1] ▲ゼノンのパラドックス [353・3] 経験の源泉に関する直観 [355・3] ◎『Introduction II』《7-59》(1292)『物質と記憶』《2-223》(335)

29節，物理学が到達した場所

- (54) 実在の究極の二重性 [357・2] ◎『現代物理学の思想』ハイゼンベルク・プロティヌス・ボーア 問われる自然と問う人間 [359・2] ベルクソンの物質理論 [360・2] 純粹知覚の仮説 [361・2] ◎『物質と記憶』《2-226》(338)

第十四章 ベルクソンと物理学 360頁

30節，物質と精神

- (55) 持続のリズム [362・2] ◎『物質と記憶』《2-221》(333) 《2-274》(376) 《2-230》(341) 《2-232》(342) 《2-231》(342) 《2-275》(377) 純粋な物質のヴィジョン [364・2] 外界を内部から捕える事 [367・2]

31節, 科学と哲学

- (56) ■『意識の直接与件論』で提出された自由 [368・2] 二元論的世界観 [369・3] ◎『物質と記憶』の序 《2-5》(161) ★『哲学的直観』[371・3] ◎『L'intuition philosophique』《7-158》(1361) 純粋な経験 [372・2] 緊張と弛緩 [366・2] 経験の一貫性 [373・2] ◎『哲学的直観』《7-158》(1362)

Ⅲ 全体構成の流れと多分野年表

『感想』（『ベルクソンの哲学－芸術と科学－』）の構成を辿り直せば、第1回は、小林自身の経験談であり、第2回にはベルクソン哲学の方法論が叙述される。第2回に提出された方法としての直観の概念は、明らかに全体に浸透しているが、さらに難しい問題は、第1回目の「おっかさんという虫」や「プラットホームからの墜落」などの経験的意味が、全56回の全体構成と如何に関連しているかである。そこには文学的実感と科学的理論との乖離を、所謂プラトン哲学的なもの（「ソクラテスのダイモン」）で統一する意図が潜在する。

第3回から『意識の直接与件論』の祖述が始まる。それにあたり、「ベルクソンを読んだ事のない読者に、ベルクソンを読んでもみようという気を起こさせないで終わったら、これは殆ど意味のないものだろう」という前置きがある。第4回の『ラヴェソンの生涯と業績』の「純粋な白光」(la pure lumière blanche) や、第5回の『哲学的直観』の「はずみ」(élan) などの概念は、全体を通して重要である。第5回で、「私の文章は、音楽

で言えば、どうもフーガの様な形で進むより他ない」と言い、第6回のシヨールペンハウエル論までに全体をめぐる主要な論点は提出されている。そして『創造的進化』『笑い』の次に、モーパッサンやシェークスピアなどの文学論がある。そこには独自性も鮮やかで、深い影響を受けたベルクソン哲学も相対化されている趣がある。しかし、それに続けて多少とも没入的に、「私はベルクソンの言葉を、要約が不可能なまま辿っている」という『知的努力』の図式とイメージ論や、『持続と同時』の問題に関連する『変化の知覚』でのゼノンのパラドックス論などがある。この辺りで、小林は自らのベルクソン論の全体構成を意識的に模索し始めたのではないだろうか。ゼノンのパラドックスは、物理学の諸問題と連続する事柄である。

第17回から第26回まで『物質と記憶』が祖述される。ここで大きな区切りがあり、第27回のフロイト論には第2回の内容と重なる性格がある。ここからもう一度やり直すような趣があり、次の「偽物の再認」では、「記憶」と「知覚」という中心概念が、さらに別の角度から吟味される。

第32回から、また『意識の直接与件論』に戻り、さらに第1回のソクラテスのダイモンの問題が語られる。明らかにこの辺りから、小林はまた最初からやり直している。そして、第35回から第47回まで、『物質と記憶』が論じられる。このテキスト研究の課題の一つに、長大な『物質と記憶』論を、何故に2回繰り返すのかという問題がある。内容はほぼ同じであるが、1回目に語られた「知覚」と「記憶」の所謂「輪道」という概念は、2回目には省かれ、各章の分量も3分の2程度である。1回目はベルクソンの祖述形式であるが、2回目はそれがより自らの言葉に直されて、論旨も明快である。こうした反復的構成は、当時の少数読者からの要望に応えたのかもしれない。だが何よりも小林自身にそうした反復を持続する欲求があったのであろう。創造過程における思想表現としては、より精緻な読み直しのうちに、一回目の内容が凝縮されている。仮に著者が、生前に『感想』

の再構成を実行していたら、一回目の『物質と記憶』の祖述は全く削除され、全体の分量は雑誌発表原稿の3分の2以下に約められたかも知れない。だが小林の『感想』の構成は、いわゆる樹木型ではなく、根茎型であり、難解な書の内容が反復された側面に長所があるとも言える。

そして第48回が『意識の直接与件論』で、それが前提となって第49回から第54回まで物理学の叙述がある。こうした物理学の部分は、ハイゼンベルクやド・ブロイの祖述が中心であり、他のベルクソンの祖述部分とは、位置の差異がある。そして再度『物質と記憶』に戻って、最後は『哲学的直観』の「哲学は、ユニテに到着するのではない。ユニテから身を起すのだ」(未完)の言葉で終わる。

この長編の哲学的文章には、その文体に変化がある。それは具体的な経験談、対象を祖述する部分、解説する部分、要約する部分、ベルクソンの文章を翻訳する部分、そしてベルクソンを離れ、小林が他の対象や自らの思想を語る部分などの質的な差異である。祖述に関しては、原書とともに『意識の直接与件論』は服部紀(『時間と自由』岩波文庫 1937年)・『物質と記憶』は高橋里美(岩波文庫 1936年)などの翻訳が下敷きにある。小林独自の翻訳は、『宗教と道徳の二源泉』や『笑い』の最後部などで、量的に多くないが、全体構成の中では重要な位置を占めている。また、第5回の『ラヴェッソンの生涯と業績』の「純粋な白光」(la pure lumière blanche)の部分などは、「テスト氏の方法」(1939年)に翻訳されたものが、微妙に改訳されている。

『感想』の内容把握のための要約は相当な分量になり、そこには論者の主観も反映される。客観的な見取り図としては、目次の方が、一般的な共通理解を持ちやすい。目次に示した部分では、「6節、言語論『笑い』の要約 [49・3] や『物質と記憶』の要約 [50・2] ○」や「24節、純粋記憶」の「『物質と記憶』論の要約 [322・2]」などに、小林自身による要約がある。

また、小林に取り上げられた主要な人物や事項を西暦順に概観すると以下のようになる。

【BC】

469ソクラテス誕生 427プラトン誕生 499ソクラテス刑死 370デモクリトスの死 301ゼノンがアテネで講義開始

【AC】

205新プラトン派のプロチノス誕生

【15～17世紀】

1500頃レオナルド・ダ・ヴィンチが活躍 1583振り子の等時性の発見（ガリレオ） 1601『ハムレット』（シェイクスピア） 1609惑星運動の法則（ケプレル） 1632『天文対話』（ガリレオ） 1637『方法序説』（デカルト） 1648パスカルの原理 1655光のスペクトル実験（ニュートン） 1657振り子時計の製作（ホイヘンス） 1658『贗才女』（モリエール） 1666光のスペクトル発見（ニュートン） 1668『守銭奴』（モリエール） 1668反射望遠鏡の発明（ニュートン） 1669光の微粒子説（ニュートン） 1670『パンセ』（パスカル） 1672『女学者』（モリエール） 1675『エチカ』（スピノザ） 1678光の波動説（ホイヘンス） 1684微積分法を発表（ライプニッツ） 1687『プリンキピア』（ニュートン）

【18～19世紀】

1704『光学』（ニュートン） 1714『单子論』（ライプニッツ） 1753大英博物館の創設 1772窒素の発見（ラザフォード） 1781『純粹理性批判』が成立（カント） 1785電気力の逆2条則を発見（クーロン） 1801光の波動説を展開（ヤング） 1807エネルギー概念の導入（ヤング） 1809体系的進化論（ラマルク） 1814『意志と表象としての世界』（ショーペンハウエル） 1814ラプラスの悪魔 1816光の干渉実験（フレネル） 1818光の横波説を発表（フレネル） 1820電流の磁気作用を発見（エールステッド） 1831電

磁誘導の発見（ファラデー） 1833電気分解の法則を発見（ファラデー）
 1842『実証主義講義』（コント） 1855実験病理学の創始（クロード・ベル
 ナール） 1856力線の概念を数学で表現（マクスウェル） 1856『ボヴァリ
 ー夫人』（フローベル） 1859『種の起源』（ダーウィン） 1860気体分子の
 速度分布則（マクスウェル） 1861自然発生説を否定（パスツール） 1861
 電磁場の基礎方程式（マクスウェル） 1864『英文学史』の刊行（テー
 ス） 1865電磁気学の基本方程式（マクスウェル） 1878光速測定（マイケ
 ルソン） 1879アインシュタイン生まれる 1881精密な干渉計を発明（マ
 イケルソン） 1885生殖質連続説（ワイスマン） 1888『ピエルとジャン』
 の刊行（モーパッサン） 1889『意識の直接与件論』（ベルクソン） 1890
 『カード遊びをする男達』（セザンヌ） 1892白血病の食菌作用を発見（メ
 チニコフ） 1895X線の発見（レントゲン） 1895精神分析学を創始（フロ
 イト） 1896『物質と記憶』（ベルクソン） 1896ウラン放射能の発見（ベ
 ックレル） 1896放射能を発見（ベックレル） 1899放射能の識別（ラザフ
 ォード） 1900メンデルの遺伝法則を再発見（ド・フリース） 1900量子
 仮説を提唱（プランク） 1900条件反射の研究（パブロフ） 1900『夢の研
 究』（フロイト）

【20世紀】

1901突然変異説（ド・フリース） 1902元素の変換を発見（ラザフォード）
 1904二極真空管の発明（フレミング） 1905特殊相対性理論・光量子仮説
 を発表（アインシュタイン） 1907『創造的進化』（ベルクソン） 1907固
 体の比熱の理論を発表（アインシュタイン） 1908『科学と方法』（ポワン
 カレ） 1908ヘリウムの原子核を突き止める（ラザフォード） 1911原子
 の有核模型を発表（ラザフォード） 1913原子構造を発表（ボーア） 1916
 一般相対性理論の構築（アインシュタイン） 1919原子核の破壊実験を行
 う（ラザフォード） 1921原子の電子配置から新元素を予言（ボーア） 1922
 X線と電子の衝突から光の粒子性を検証（コンプトン） 1922アインシュ

タインの来日 1923物質波の概念を提唱（ド・ブロイ）1927不確定性原理を発表（ハイゼンベルク）1932『道徳と宗教の二源泉』（ベルクソン）

以上の様に、取り上げられた対象は哲学者そして科学者あるいは文学者、芸術家と多岐に亘る。固有名詞の割合として物理学者への言及が多いことが『感想』の特徴である。

Ⅳ 螢の印象と物理学

ショーペンハウエルやフロイトの思想がベルクソンと関連するという問題も別個に検討しなければならない。だが、もう一つハイゼンベルクとベルクソンとの類縁関係の問題がある。この章ではそうした物理学に関する幾つかの問題点を挙げてみたい。

第49回から第54回に亘る後半で、光の波と粒子の二重性が説かれる物理学の部分は、前後のベルクソン論と深く関連する⁴⁾。小林は若い頃から物理学に対する関心を抱き、そのことは彼の初期の批評作品やドストエフスキイ論にも表れている。また湯川秀雄や岡清など専門家との対談にも、その確かな認識は活かされた。そうした分野を横断する多様な交流が可能であった側面が、小林の特質である。だが小林は自らの物理学の認識を纏まった形で展開したことは、それまでなかった。それはどこまでも彼の批評に潜在的に反映されているに過ぎず、『感想』で初めて現代物理学の諸問題が正面から取り上げられた。その論述の方法は、ベルクソン論と同様な祖述形式であり、主な典拠はハイゼンベルクの『現代物理学の思想』「第二章 量子論の歴史」である。また「第三章 量子論のコペンハーゲン派の解釈」からの引用も顕著である。またルイ・ド・ブロイの『物質と光』の「一 現代物理学の概観」「二 物質と電気」「三 光と輻射線」「四

波動力学」など各章の抜粋的な祖述が目立つと言える。他にはアインシュタインの『物理学はいかに創られたか』なども踏まえられている⁵⁾。

小林は初心者にも理解できるように数式を使わずに量子論や相対性理論が登場した歴史を解説する。それはアインシュタインの入門書よりも難解であるが、ハイゼンベルクやド・プロイの解説を簡明にしたような趣である。所謂エネルギーの放出や吸収は、ただ飛び飛びのエネルギーの量子だけでしか出来ないというプランクの作用量子に関しては、「物質は、振動数 V と所謂プランクの常数 h との積に等しい有限の量ずつしかエネルギーを失う事は出来ない」(第49回)、また、「不連続的構造を持つものは、物体や電気に限らない。エネルギーもその作用の単位を持ち、力の自由な増減の不可能な構造を有する、という驚くべき仮説を事実の観察から強制されて困惑したのはプランク自身であった」(第50回)、あるいは「プランク常数 h が、極めて小さいが或る有限値を持ち、無限大でも無限小でもないという事は、いかにも不思議な事である」(第51回)と解説される。こうした言葉使いは、ド・プロイのそれに近い。

光の性質が波でも粒子でもあるパラダイム転換の歴史が叙述されるが、小林が特に問題にしているのは、四次元のアインシュタインの相対性理論は、実在の客観的記述に関して画期的な理論であったが、五次元の量子論は、逆に実在の客観的記述は不可能であることを示したということである。粒子を見るときは、それに光を衝突させ、粒子の位置と運動量を変化させてしまう事である。その位置を精密に測定しようとするとき、測定法自体によって、運動量の測定が曖昧になる。二つの量を同時に測定する如何なる方法も不可能である。そこには絶対的と見える不確定性がある。観察対象と観察方法の間に、在来の物理学的な一線を引くことは人為的であることが二十世紀の科学に証明された。一つのパラダイムを拒否する決断は、同時に他のパラダイムを受容する決断でもある。小林はそうした変則的な危機状態にある現代物理学の動向に、分野横断的な関心や反応を示し、危機の

根源にある哲学的問題を明らかにしようとした。

湯川秀樹との対談で、小林が、「人間は自分の発明した技術に対して復讐されない自信があるかどうか、それほど強いでしょうか、人間という奴は……。」「人間の進歩について」（1948年8月）と発言した所の意味は、現代の原発問題の閉塞状況と照らしても重要である。『感想』には、そうした科学技術と人間の問題の検討に有用な原理的思考が展開されている。だが、岡清との対談（「人間の建設」1965年10月）で、小林が次のように述べたことの一部は、新潮社の『感想』諸言にも記されている。

岡　ベルグソンの本はお書きになりましたか。

小林　書きましたが、失敗しました。力尽きて、やめてしまった。無学を乗りきることが出来なかったからです。大体の見当はついたのですが、見当がただけでは物は書けません。そのときに、またいろいろ読んだのです。そのときに気がついたのですが、解説というものはだめですね。私は発明者本人たちの書いた文章ばかり読むことにしました。

小林がここで「そのときに、またいろいろ読んだ」という書物の中心にハイゼンベルクの『現代物理学の思想』やド・ブロイの『物質と光』などがあつた。この対話のやりとりで、小林は「失敗しました」と言う。だが、彼の試行錯誤の齎した恩恵が多いことも事実である。ここでは、その「大体的見当はついた」とは、如何なる事なのかを考えてみたい。それは、第54回の冒頭で、次のように言われた事柄であろう。

内省によって経験されている精神の持続と類似した一種の持続が、物質にも在るというベルグソンの考えは、発表当時は、理解し難い異様なものと思はれたが、今日の物理学が到達した場所から、これを顧

るなら、大変興味ある考えになる。物理学が、常数 h の有限値の為に、物的世界を、マクロコスムとミクロコスムの二つの世界に区分して理解しなければならなくなった事は、「実用の [プラティック]」世界の奥に「運動性 [モビリテ]」の世界が在るというベルグソンの哲学的反省に一致している。そうは言えないとしても、両者は決して無関係ではあるまい。

精神の持続と類似した物質の本性とは、コペンハーゲン派の「量子的飛躍」や「状態の共存」などの解釈のことを指す。ベルクソンの「運動性」とは、詳細目次の第七章の『変化の知覚』でも説明されていた。変化とは、それを支える支柱を必要とするものではなく、運動も同様で、自らは動かない不変なものが動くような物はない。科学は支柱を指定するが、科学が進むほど、そうした支柱は後退して、物質の塊は分子から原子や電子に別れて、動きを支えるものは便宜的図式になって来たという見方である。

小林は、實在の不確定性は、直観された實在の運動性の上に投射された知性の二律背反的な構造だと言う。運動を知覚する感覚的事実と、それを再構成する悟性的作為とは異質である。実用の背後にある自然の設計は悟性の作為では、捉えられないという点で、現代物理学とベルクソンは通底すると言うのである。小林はハイゼンベルクを思想をベルクソンと同様に祖述し、その「不確定性の原理」や「状態の共存」という物質世界の矛盾性に深く傾倒した。しかし、シュレーディンガーを始め、アインシュタインもコペンハーゲン派の解釈に異論を唱えた。観測前に幅を持って空間に広がっていた電子の波は、観測することで、幅のない針状の波に「収縮」する。コペンハーゲン派には、観測者が測定の結果を確認する時に、確率函数が不連続的に変化するという事実をめぐって、所謂「波束の収縮」という解釈がある。コペンハーゲン解釈では、複数の状態が共存しているはずである。それなのに観測した時に、そのうちの一つしか観測されず、観

測されなかった他の状態が何処に消えたのかを説明していない。この件に関しては謎が残り、物理学者の中で意見が一致していない。ハイゼンベルクは『現代物理学の思想』の「第八章 コペンハーゲン派の解釈の批判」で、そうした問題を彼自身の立場から整理しているが、小林はそのことに関しては触れていない。それは、ハイゼンベルクの精妙な解説に全く加担したというよりも、真偽の判断を保留したのではないであろうか。たしかに現代物理学の物質理論はコペンハーゲン派が主流であるが、現代物理学の立場は多様であり、そこには「多世界解釈」なども存在する。

だが、第26回や第47回の記憶論にも解説されたように、記憶の拡散と収縮にの二重性に関しては、どちらの極に近づいて平衡が保たれるかによって、無数の精神生活の面が潜在的に共存する。記憶は拡散するにつれ自転し、個人的な姿になり、収縮するにつれ移転しながら前進して、それは共通の姿になる。そして第56回の「物質の諸瞬間を収縮するという点で、精神は物質とは全く異なる」という事は、「波束の収縮」という観測するから事実が生じるというコペンハーゲン解釈と確かに類似している。

ベルクソンの記憶論の特質は、その拡散と収縮の二重性にある。そうした記憶なしには知覚はされないという考えは、観測方法と観測対象は切り離せないというハイゼンベルクの思想と似ている側面がある。小林はそのことを断言するのを保留したが、記憶の収縮と拡散は、波束の収縮と消滅と何らかの関係があるというのは、小林が岡清に「大体の見当はついた」と述べたことの一つであろう。そこには意識の発生論に関わる問題がある。

私達が『感想』を通読する時、第1回目の、いわゆる文学的イメージに小林が戻れないような印象を受ける。「門を出ると、おっかさんと言う虫が飛んでいた」あるいは水道橋のプラットフォームから墜落しながらも、「私は、黒い石炭殻の上で、外灯で光っている硝子を見ていて、母親が助けてくれた事がはっきりした。」という経験の意味は、ベルクソンの言う所の、表象的あるいは自発的記憶の一種である。これが全体構成に、如何

に浸透しているのであろうか。

小林は「おっかさんという蛍」に関して、「或る童話的経験」ということを言った。だがそれに続けて、多少とも含みのある発言をする。それは、「では、今、この出来事をどう解釈しているかと聞かれれば、てんで解釈なぞしていないと答えるより仕方がない。と言う事は、一応の応答を、私は用意しているという事になるかも知れない。寝ぼけないでよく観察してみ給え。童話が日常の実生活に直結しているのは、人生の常態ではないか。何も彼もが、よくよく考えれば不思議なのに、何かを特別に不思議がる理由はないであらう。」という表現のニュアンスもその一つである。この時、小林に用意されていた応答とは、科学的理論を全く無視した単なる文学的実感ではないであろう。所謂リアルとメルヘンの相反が、彼の中で不可分な位置がある。それは潜在的な共存としての多様性の一種である。

他にも第1回での、小林が蛍を見て、犬に吠え付けられ、子供に追い越されて、電車が走り抜けた後、踏切に着いた時、「横木を上げて番小屋に這入ろうとする踏切番と駈けて来た子供二人とが大声で言い合いをしていた。踏切番は笑いながら手を振っていた。子供は口々に、本当だ、本当だ、火の玉が飛んで行ったんだ、と言っていた。私は、何んだ、そうだったのか、と思った。私は何の驚きも感じなかった。」という記述にも妙な含みがある。そもそも毎年、蛍が飛ぶ場所のようであるが、この話の信憑性は、二人の男の子が、ほぼ同時に火の玉を見たという所にもある。犬も火の玉を小林の背後に見たかもしれないが、踏切番は見なかったのであろうか。だが電車が走り過ぎる時には、火花ぐらいは散るであろう。踏切番には電気現象は日常的であろう。いわば、この話には、一つの時間の流れの中で、其々の観測者の立場が念頭に置かれ、小林に心理的且つ物理的にも直知された同時性がある。このことはテキストの構成を横断的に眺めれば、後半の第52回の相対性理論に関する、「様々な座標系に在る観察者とは、物理学者アインシュタインの分身なのであり、彼等はいめいめい、彼の立つ局所

と、彼を動かす運動との中心であり、事件自体と一致している。めいめいが、他の視点から己れを理解するとともに、己れの視点から他を理解している。そこにいささかの一致も混同も行はれない。」という記述と、潜在的に関連しているようにも読める。いわば客観的実在を極めたアインシュタインの科学理論が、それと異質なベルクソンの哲学理論をさらに際立たせて、その時の小林の知覚を形成しているのではないか。別の所では、「最近の物理学者が、物の外形を破壊して得る物の夢の様な内部構造も、物の不滅の外形にまつわる画家のヴィジョンの一様式に過ぎないのではないか」（『偶像崇拜』1950年）と述べる。小林の一応の応答とは、ソクラテスのダイモンが根底にあり、それは科学を踏まえた芸術とでも言えるような論理である。

第49回で、「自著『持続と同時』の絶版が起こったが、これについては、いずれ触れねばならない。」と前置きがあったが、第52回でアインシュタインの相対性理論が解説される。アインシュタインは『物理学はいかに創られたか』（Ⅲ 場・相対性(2) 場と物体）で、「石を投げるということは、その石の速度で、場の強さが最大になっている有様が空間を進んでゆくということになるので、つまり投げられた石はそのように変化する場に外ならない」と言う。小林は場と物の関係を、「物が場のうちに運動するという考えは、場の変化が物の運動を規定するという考えに代わった。」と言う。どちらも専門外の人々に通じる表現の一種である。そして第53回では、ベルクソンの理論は、純粹経験としての物質精神連続体であり、それは経験のうちに現前し、科学者の四次元連続体とは実在理解が異なると述べる。ハイゼンベルクに関しては第54回で、「私達が観測するものは、私達の質問の仕方にさらされた自然である」を引き、その意味を、問はれる自然と問う人間との間には、空隙はないと解釈する。言わば、思想的には、「おのずからなる自然」とは、みずからの問いに曝された自然のことでもあり、その間（あわい）の場の存在の意味が浮き彫りになってくる。そして、第

54回の途中で、「物質の原子状態の研究は、物理学を、認識論と存在論とが離す事の出事ぬ領域、即ち自然のうちに生きている私達の現実の状態に連れ戻したと言える。だが、もう、知覚理論と離す事の出来ぬベルグソンの物質理論に戻ってもよからう。」と物理学の問題を切り上げようとする。

そこから方向転換して、『物質と記憶』の祖述に戻る。だが再度ハイゼンベルクに触れ、第55回で、「先ず自然が在り、次に人間の生活があり、次に悟性の発明があった。この自然の順序を転倒してはならぬ、というのがベルグソンの考えなのだが、これは、量子論から導かれたハイゼンベルクの考えと同じ事である。」のようにベルクソンの物質理論と同定される。

第55回には、持続のリズムという重要な問題が展開される。詳細目次にも示したが、『物質と記憶』の祖述というより引用が目立ち、その引用が多少とも混乱していて、この回の内容は未完成のまま雑誌『新潮』に掲載されたのではと疑われる部分がある。(363頁6行～8行・364頁18行・368頁4行～8行) いわば小林の悪戦苦闘の痕跡が伺える。この回の内容では「予言は的中したと言っても過言ではない。少なくともこうは言えるだろう。」という確信とためらいの矛盾した前置きを付けて、「ベルクソンの物質理論は、彼のメタフィジックのほんの一部を成すものだが、彼が、自分の仕事をポジティヴィスム・メタフィジックと呼んだ真意は今日のフィジックが明らかにした筈だ」と述べる。こうした結論は第49回から第54回までに区切りをつけながらも、第55回にも延長された物理学の問題として、小林が何とかして検証したかった事柄の一種と考えられる。だが、現代物理学の物質理論は多岐に亘り、必ずしもベルクソンと同定されない側面があり、小林の個人の認識を超えていた。ベルクソンが『物質と記憶』で、物質の持続の真相については決して断言はしていないという点が、小林の注意をひき、ここでもその態度に倣ったとも考えられる。そのことに無意識でありえないが故に、確信とためらいの絡まりあった表現になるのだと考えられる。小林は第52回で特殊相対性理論と一般相対性理論の精妙な解

説はしたが、アインシュタインの理論とベルクソンの『持続と同時』の質的な差異に関する論述はしていない。むしろプラトンやプロティヌスの思想を背景に、ハイゼンベルクとベルクソンの同質性の解説に、加担し過ぎている印象を受ける。仮に、第55回の次に、ベルクソンの『持続と同時性』の解説が、相対性理論との関連で位置づけられたのであれば、第1回の逸話も、おのずから浮かび上がるのではないであろうか。

晩年に小林は、「ドゥルーズという若い人がいてね、この人の『ベルクソニズム』という本はなかなかいい。ベルクソンの影響された当のものは、プラトンしかない、と言っているんだな。つまり『持続』なんだよ、要するに、こう流れる、これは『歴史』なんだよ」(『小林秀雄の思ひ出』郡司勝義)と述べた。

ドゥルーズの書は全体に渡ってベルクソンの「質的な差異」という概念をめぐって展開される。その構成はベルクソンの直観という方法から入り、そこには小林も第20章と第35章で繰り返した所の、『意識と生命』にある「事実線の交錯」の問題が取り上げられる。そして「直接与件」の問題から「記憶」の問題へと続き、『持続と同時』をめぐって、アインシュタインとの関係でベルクソンの長所を強調するという点では、小林が回避した論証を、積極的に推し進めた書とも言える。

「『持続と同時性』全巻を通してのアインシュタインに対するベルクソンの非難は、アインシュタインが潜在的なものと現実的なものを混同した点に向けられている(象徴的な要因、つまり虚構を導入したことが、この混同を表現している)」というのがその主旨である。そうした象徴・虚構の支配は、いわゆる体験された時間の支配ではないというのは、小林の立脚地でもある。ドゥルーズは、ベルクソンが批判するのは、空間を既製のものとし、従って時間を空間の第四次元と見なすような、よく分析されない混合物の中に、空間と時間を結合する考えの全てだと言う。

こうした事柄は、『差異について』ドゥルーズ 平井啓之訳 青土社

1989) の、『『持続と同時性』』のなかで、ベルクソンは持続に、自己を一丸とする奇妙な能力、注意の性質にしたがって、いくつかの流れに分かたれると同時に唯一の流れへと集中する能力を貸し与えている」と言われ、こうした「唯一の流れ」という単一な時間の論証は、『ベルクソンの哲学』の第二章と第四章に亘ってより精緻に展開されている。晩年の小林がこの書に関心を示したことも頷ける。

小林の『感想』に戻れば、第56回は、第2回にも似て、全体の総括の様にも読める。そして最後の「哲学は、ユニテに到着するのではない。ユニテから身を起こすのだ」(未完)の言葉とともに終了する。この『哲学的直観』にある言葉の原文は、*car le philosophe n'est pas venu à l'unité, il en est parti.* であり、第5回では「哲学は、統一から出て来る道であって、統一に達する道ではない」と訳されていた。それが「ユニテから身を起こす」と極めて特徴的に改訳されたのは、吉田松陰が久坂玄瑞への書簡で語った、「天下為すべからざるの地なく、為すべからざるの身なし。但だ事を論ずるには、当に己の地、己の身より見をを起こすべし、乃ち着実と為す」(『丙辰幽室文稿』安政3年〈1856年〉6月2日)などの言葉遣いの影響もあるのではないであろうか。この最後の言葉には『感想』の紙背に潜在する中心に収斂される「純粋な白光」のようなものがある。循環的に出発点戻れば、『感想』の第1回目「おっかさんという蜚」や「プラットホームからの墜落」の体験談には、いわゆる文学的イメージを食み出すような相対性理論や量子論などの物理学的問題も暗示されているのではないであろうか。小林は、「黒い石炭殻の上で、外燈で光っている硝子を見ていて、母親が助けてくれた事がはっきりした。」と言う。水道橋の駅では先週には反対側のプラットフォームから落ちて即死した人もいたらしい。重力現象を合理的に考察すれば、その帰結として小林の生命は危なかった。しかし経験的事実として、かすり傷一つなかったのである。そこには母親の魂の不滅に関する神秘的確信のようなものが根本にある。だが、その後の小

林がそうした確実性だけを信じて、自らの命拾いの哲学的蓋然性を測定しなかったとは考えられない。経験の反響ということで言えば、第1回の、「あの経験が私に対して過ぎ去って再び還らないのなら、私の一生という私の経験の総和は何に対して過ぎ去るのだろうか」という問いは、潜在的に反復され続けた。小林が「門を出ると、おっかさんという蛍が飛んでいた」あるいは、「母親が助けてくれた事がはっきりした」と、記述することは、決定的な記憶の収縮になったのではないか。小林には書くという行為が、観測定の一種なのであろう。

『感想』の主題は、「直接事実の反響のうちに身を置きつつ、直接事実を対象的に捉え、そのことを介して、現存する自己とはなにかを明らかにすること」(『小林秀雄－近代日本の発見 佐藤正英 講談社 2008年』)(6であるが、所謂「おっかさんという蛍」という直接事実を対象化するには、ベルクソンの海を泳ぐことを介して、その海の外に出る必要がある。後半の第49回目から第54回までの物理学への言及は、そうしたベルクソン哲学の物質理論の総体を捉えかえす試みであった。それは同時に、第1回目の、所謂〈たま〉としての母をめぐる〈もの〉のイメージに戻ることでもある。逆に言えば、第1回の段階で、既に小林の中で第49回から第55回の実在の究極的二重性という物理学的記述の漠然とした構想はあったとも考えられる。

この作品は不思議な体験的逸話から始まり、その文体は、文学的実感で綴られている。そして第1回の神秘的直観の確実性が、様々に変容しながらも、第56回までに、如何に一貫して持続されたのか、あるいは、されなかったのかという問題が、この『感想』にはある。言うなれば光をめぐる印象が最後の光学論まで不可分に持続出来れば、小林の意図は効果的に成功したことになる。こうした創造過程における思想表現には、その効果が成功しているかどうかは別として(小林はそれを失敗とみなした)、位置づけとしては最も遠く見える文学的実感と科学的理論という領域が、哲学

の現場において近似値を持つのではないか。神秘的確実性と哲学的蓋然性との融合は、審美的直観という芸術性とも絡まり、それが科学的な高次の蓋然性を認識する手立てになったとも考えられる。そうした物質精神の連続体としての彼自らの純粹経験に関わる告白と論証の難しさが、『感想』の出版禁止の理由の根底にある。ベルクソンの出版禁止の遺書から、この『感想』が始まったことは、やはり異様である。母親と前後して、この世を去ったベルクソン論とは、小林の哲学の故郷を暗示している。その意味では『ベルクソン哲学－芸術と科学』という主題の背後には、「神話あるいは物語と哲学的直観」という問題も潜在的に共存している。そうした潜在的な多様性が同時進行の「近世儒学論」や、後の、『本居宣長』という新たな創造の現実化に向かって、躍動しつつある。

ベルクソン哲学に関する問題は性急に解決されず、むしろ提出された。私達に残された課題は、その未完の意味の深みを踏まえて、提出された問題の解決を一步でも前進させることである。本稿では『感想』研究の基礎作業として、先ずは本文の見取り図を模索し、小林の使用した典拠を確定しながら、後半の物理学の意味などを検討した。

注

- 1) 本稿では、テキストは第六次「小林秀雄全集」(新潮社)を使用した。以下各章に渡って、引用文の仮名使い、句読点、文字使いなどは適宜、旧字体を新字体に改めた。
- 2) (『ベルクソンの哲学』ジル・ドゥルーズ 宇波彰 訳 法政大学出版局 1974年)の目次は「第一章 方法としての直観(方法の五つの規則) 第二章 直接与えられたものとしての持続(多様性の理論) 第三章 潜在的共存としての記憶(過去の存在論と記憶の心理学) 第四章 持続は一か多か(持続と同時性) 第五章 差異化の運動としてのエラン・ヴィタル(生命・知性・社会)」である。
- 3) (「小林秀雄の知的努力—『感想』をめぐる—」出岡宏『近代日本思想を読み直す』実存思想論集第二期第九号 理想者 2002年)に、全体を14の部分に分割する視点が示されており、本稿の分割もそれと基本的に同様である。
- 4) (『小林秀雄とベルクソン「感想」を読む』山崎行太郎 彩流社 1991年 「第一章

小林秀雄と理論物理学)に「小林秀雄の批評は、アインシュタインの「相対性理論」の出現と、ハイゼンベルグらの「量子物理学」の出現とに代表される、かつてない大きな二十世紀の「科学革命」という歴史的状況の中から生まれてきたものであった」とある。

- 5) 『現代物理学の思想』ハイゼンベルク 河野伊三郎・富山小太郎訳 みすず書房 1959年)の「第二章 量子論の歴史」や(『物質と光』ルイ・ドゥ・プロイ 河野与一訳 1939年 岩波新書。尚1972年 岩波文庫)の「一 現代物理学の概観」などが基になって、小林の『感想』49回から54回の物理学の論述は出来ている。ハイゼンベルクに関しては、第54回に小林に典拠が示されたい。その内容はベルクソンに関する章と同様に、小林に対自化された祖述であるが、原文(翻訳)の引用が明らかなハイゼンベルクの書の頁を挙げれば、第49回には5頁、第54回には、34頁・36頁・37頁、第55回には、35頁などである。ドゥ・プロイの書(岩波文庫)の頁は第50回は137頁、第51回は50~51頁、196頁などに引用があるが、小林による祖述の言葉遣いが最も近いのが『物質と光』で、その影響は全般に亘る。だが『感想』51回の344頁9行の、「その値が無限大だったとするなら、 $h\nu$ の値を持つ光子は無限小になる」は、ド・プロイを正確に祖述するなら、「その値が無限小だったとするなら、 $h\nu$ の値を持つ光子は無限小になる」でなければならない。この誤植は文章理解を損ねるので、直す必要がある。他には、『物理学はいかに創られたか』初期の観念から相対性理論及び量子論への思想の発展 アインシュタイン インフェルト 石原純訳 上下 岩波新書 1940年)なども典拠であり、下巻の163頁などが引用されている。尚、『ハイゼンベルク』村上陽一郎岩波書店、1984)の「第十章ハイゼンベルク-思想家としての」で、村上氏は『現代物理学の思想』に関して、「この小さな書物との濃密な付き合いが、私のハイゼンベルクとの出会いであった」と言う。そしてコペンハーゲン派の解釈の圧縮された表現の例として、『部分と全体』の「科学は人間によってつくられるもの」という言葉を引き、それを『現代物理学の自然像』の「自然科学はいつも人間を前提にしている」という根本思想の再現とみなす。こうした事柄は、小林が『感想』のハイゼンベルク論で語った問題意識と重なる。
- 6) 『小林秀雄-近代日本の発見』佐藤正英 講談社 2008年。